



筑摩世界文學大系

69

ロレンス

小野寺 健 訳
幾 野 宏



息子と恋人他

筑摩書房

筑摩世界文學大系 69

昭和四十八年四月十六日

初版第一刷発行

ロレンス

訳者

小野寺健

発行者

幾野宏
井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一―二三

印刷 三晃印刷

製本 鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20669 (出版社) 4604

目次

息子と恋人	小野寺健	5
狐	幾野宏	277
死んだ男	幾野宏	324
歡びの幽霊たち	幾野宏	354
ラヴリー・レイディー	幾野宏	385
D・H・ロレンス	ウイリアム・小野寺健	399
解説	小野寺健	409
年譜		417

ロ レ ン ス

息子と恋人

第一部

第一章 モレル夫婦の初期 の結婚生活

「谷底住宅」が建った場所は、以前は「地獄長屋」であつた。地獄長屋というのは、壁がぶくぶく膨らんだ茅葺きの貧弱な家ばかりで、グリーンヒル横丁の小川ぞいにあつた。そこに住んでいたのは、野原ふたつへだてた向うの、小さな露天掘りの炭鉱の坑夫たちである。ささやかな炭鉱は、榛の木立の下を流れる小川を汚すこともなく、輪になって並んだ驢馬がとぼとぼ廻ると、起重機がものうげに動いて石炭を地上へはこびだしていた。この地方には、チャールズ二世の時代（一六六〇—一六八五）から採掘していたいくつかの山をふくめて、いたるところにこれと同じような炭鉱があり、わずかな数の坑夫と驢馬とが地面の下に蟻のような穴を掘っては、麦畑や牧草地のまんなかに奇妙なかたちの小山や黒い

しみをつくっていた。そして、こういう坑夫の家の小さな集落や二軒長屋があちこちにあり、小さな農家や靴下の製造を業とする家が教区にいたるところにちらほらと見える、これがベストウッドの村であつた。

ところが、六十年ほど前に急激な変化がおこつた。露天掘りの炭鉱が、資本家の経営する大鉱山に押しつけられてしまったのである。ノッチンガムシャーとダービーシャーにまたがる炭田と鉄鉱が発見されたのだつた。カーストン・ウェイト会社が登場すると、村をあげての興奮のうちに、パーマストン卿がスビーニー・パークにできた、会社初の炭鉱の開坑式をおこなつた。チャーウッドの森のはずれである。

そのころ、古くなるにつれてすでに人の住むところではないように言われていた地獄長屋が焼き払われて、目ざわりなごみが一掃されたのだつた。

カーストン・ウェイト会社は、この鉱山があつたものだから、さらにセルビーからナットールにいたる方々の川の流域に新たな炭鉱を掘り、たちまちのうちに六つの鉱山から石炭が搬出されるようになった。ナットールは、森に囲まれて砂岩の高台に立つ町である。鉄道はここからカルト教団の僧院の廃墟を過ぎ、ロビン・フッドの井戸の古跡を過ぎてスビーニー・パークまで降り、さらに麦畑の中の大きな炭鉱、ミントンにいたる。ミントンからは谷間の耕地の中をバンカーズ・ヒルまで行くと、ここで二線に分れて一線は北に向いベガリーへ、さらにその

北のクリッチやダービーシャーの山々を望むセルビーへと続いた。田園の中の黒い汚点のようにな六つの炭鉱は、鉄道という鎖で環状につながっていた。

大勢の坑夫を収容するために、カーストン・ウェイト会社はベストウッドの丘の斜面に「スクウェア」の名で通つた、四角形に配した大きな建物をいくつも建て、つづいて谷間の川ぞいの「地獄長屋」があつた跡に「谷底住宅」を建てた。

谷底住宅は、ドミノのさいころの六のように三軒長屋が二列ずつ並んで、十二軒で一区画になる坑夫用の住宅だつた。二列に並ぶこの住宅はベストウッドから降るかなり急な斜面の麓にあり、すくなくとも屋根裏部屋の窓からなら、セルビーに向つてのびるゆるやかな谷の斜面を見渡すことができた。

家屋自体はどっしりしたりつばなものであつた。一巡してみても、表のあるかないかの庭には、一番低い位置の日当りの悪い区画の家なら黄色い桜草やユキノシタが咲いているし、一番上の日当りのよい区画の家ならアメリカ撫子や撫子が咲いている。表側の窓は小さいだし、ささやかなボーチもあれば、いたるの生垣、それに屋根裏部屋から突き出た窓も見える。しかしこれは外側のことだつた。坑夫の妻たちにすれば、これは誰も使っていない表の応接間までの眺めでしかなかった。居間や台所は裏にあって背中あわせの区画との間を向いており、そこから見えるのはいじけた灌木の生えた裏庭と、その向

うにあるごみ捨ての穴だった。この家と家のあいだ、ずらりと並んだごみ捨て場にはさまれて細い路地がある。ここが子供たちの遊び場でもあれば、女たちが世間話をしたり、男たちが煙草をふかしたりする場所にもなるのだ。したがって、建物の造りはどっしりしているし見た目はいかに良くても、谷底住宅で実際に暮すのはやりきれなかった。いつも暮すのは台所であり、台所の前はごみ捨ての穴がずらりと並んだ不潔な路地だったからである。

ミセス・モレルは、そう谷底住宅に移りたいと思ったわけではなかった。ベストウッドより低いところにあるこの住宅に彼女が移った時には、こゝも建築後すでに十二年たつて傷みはじめていたのである。しかし彼女にはほかにどうしようもなかった。それに彼女がはいった家は一番上の区画の、端にある家で、したがって隣家は片側の一軒だけだったし、反対側の庭はその分だけ広かった。端の家にはいったおかげで、彼女は両隣にはさまれた家の女たちに対して社会的な優位を味わうことができた。ほかの家の家賃は週五シリングなのに、彼女は五シリング・六ペンス払うのである。しかしこの身分的な優位も、ミセス・モレルにはたいした慰めとはならなかった。

彼女は三十一歳で、結婚して八年になっていた。どちらかといえば小柄で、きゃしゃな身体つきだったがきりっとしたところのある彼女は、はじめ、谷底住宅の女たちになかなかなじめなかった。越してきたのは七月で、九月には三番

目の子が生まれる予定だった。

夫は坑夫だった。この新しい家に移ってまだ三週間しかたない時、公休日つまりお祭りがやってきた。夫がそのあいだじゅう飲み歩くにきまっているのを彼女は承知していた。彼はお祭りの始まった月曜の朝はやく家を出て行った。ふたりの子供たちはすっかり興奮していた。七つのウィリアムは朝食がすむとすぐにお祭りのある空地进行るつぎに飛び出して行ってしまい、おきざりにされたまだ五つのアニーは、自分も行きたいと言つて午前中ずつとぐずぐず言い通しだった。ミセス・モレルは自分の用をしていった。まだろくに近所の人たちを知らなかったから、小さい女の子を頼める相手はいなかった。そこで彼女は、昼御飯を食べたら連れて行つてあげるから、とアニーに約束してやった。

ウィリアムはまた十二時半に戻ってきた。金髪でそばかすのある実に活発な男の子で、どことなくデンマーク人かノルウェー人のような感じがする。

「お母さん、御飯できた？」彼は帽子もぬがずに駆けこんで来るとどなった。「だって一時半から始まるんだよ、向うの人がそう言ってるんだ」

「できたらずく食べさせてあげます」母親は答えた。

「できてないの？」青い目で憤然と母親をにらんで、彼は叫んだ。「じゃ、食べないで行く」「そんなまねはさせません。五分もすればできます。まだ十二時半よ」

「始まっちゃうよ」男の子はべそをかきだしそうな声でどなった。

「始まったってかまやしないじゃないの」母親は言った。「それにまだ十二時半なのよ、たっぷり一時間はあります」

少年があたふたと食卓の準備にかかると、三人はすぐ席についた。みんなでジャムをつけたブディングを食べている時、少年は椅子から飛びあがって耳をすました。遠くからかすかなメリーゴーラウンドの音楽とラッパの音がきこえ始めたのだった。彼は頬をびくつかせて母親を見た。

「だから言ったじゃないか！」彼は言うとき食器戸棚の上にある帽子のところへ飛んで行った。

「ブディングを持って行きなさい——それにまだ一時五分過ぎなんだから、始まってやしないわよ——」お小使いの二ペンスだつてもらつてないでしよ」母親は一息に言った。

こう言われた子供はがっかりしてもどつてくると、二ペンスもらつて一言も言わずに出て行った。

「あたしも行く、あたしも行く」アニーは言いながら泣きだした。

「さあ、連れてつてあげるわよ、泣いて騒ぐんじゃないの、うるさいわね」母親は言った。そしてしばらくたってから、彼女は子供をつれて丈夫の高い生垣の藎をとぼとぼ丘の上まで登って行った。すでに草を刈りとった牧場では牛が二番草を食んでいた。暖かい、おだやかな午後だった。

ミセス・モレルはお祭りが嫌いだ。メリーゴーラウンドは、蒸気機関で動かすのと、小馬が引いているのと二つあった。三つの手廻しのオルガンが鳴り、射的場でピストルを打つ音がときどきこえてくる。椰子の実投げの客寄せの男が振るがらがらがやかしい音を立て、サリー小母ちゃんがくわえているパイプを落した人は、と男がわめき、ピープ・ショウの女も金切り声をあげている。母親は、ウォーレス・ライオンの小屋の前で、息子がずらりと並んだこの有名なライオンの絵に恍惚とみとれているのを見つけた。黒人を一人殺し、白人を二人生涯の不具にしたライオンだった。彼女は息子にはかまわずに、アーニーに餌を一本買ってきてやった。しばらくたつと、ひどく興奮した少年が彼女のところへやってきた。

「来るなんて言わなかったじゃないか——すごくいろんなもんがあるでしょ——あのライオン、人を三人も殺したんだよ——ぼく、あの二ペンスつかっちゃった——それで、ほら、見て」彼はピンクのバラの絵がついている卵立てを二つ、ポケットから引っぱりだした。

「あの小屋でももらったんだよ、ビィ玉を穴中へいれるんだ。二度やったら、二度とも続けてはいったんだ——一度が半ペニーなんだよ——バラがついてるんだ、ほら。ぼく、これが欲しかったんだ」

母親は、彼が自分にくれるためにそれを欲しかったのだということを知っていた。「まあ！　ほんとうにきれいなね」彼女も気に入

っていた。

「お母さん、持っててくれる？　ぼくこわしやしないかとこわくって」

母親が来たというのですすっかり興奮した彼は、お祭りの広場で彼女を引っぱりまわして、何から何まで見せて歩いた。ピープ・ショウのところでは、母親が絵に物語を作ってきたかきかきと、彼は魅せられたように耳を傾けた。けっして母親から離れようとはしなかった。子供らしく母親が得意でたまらない様子で、いつもびつたりくっついていた。小さな黒のボンネットに袖なしのオーバーを着た彼女のように上品な女は、他にはいなかったのだ。彼女は知っている女に会うと微笑した。そのうちに疲れて来ると、彼女は息子に、

「さあ、もう帰る、それともまだいる？」と聞いた。

「お母さん、もう帰るの？」彼はすっかりふくれて叫んだ。

「もうですって？　四時を過ぎてるんですからね」

「どうしてこんなに早く帰るのさ」彼は訴えるように言った。

「あんたはまだいいわよ」彼女は言った。彼女が娘をつれてゆっくり歩きだすと、息子は母親が行ってしまうのを情なく思いながらも、お祭りから帰る気にはなれなくて、じっとその姿を見送った。月星亭の前を通りかかったとき中でどなっている男たちの声を聞きビールの匂いのかいだ彼女が、きつと夫もここに居るだらう

うと思つてやや足を早めた。

六時半になると、息子はすっかり疲れて、やや青白い、それにどことなくみじめな顔付で帰ってきた。彼は、自分ではわかっていなかったけれども、母親を一人で先に帰してしまつたのが情なかつたのだ。母親がいなくなつてからは、お祭りもちつともおもしろくなかつた。

「お父さん帰ってきた？」と彼は聞いた。

「いいえ」

「お父さん月星亭で給仕の手伝いしてるんだよ。窓んとこの、たくさん穴があいている黒い金のあいだからのぞいたら見えたんだ、腕まくりしてたよ」

「ほんとう！」母親は不機嫌に叫んだ。「お金を持つてないのよ。すこしでもいいからお手当にありつきたいんでしょ」

薄暗くなつてもう針仕事もできなくなると、

ミセス・モレルは立ちあがって戸口の方へ行つた。いたるところから祭日の興奮とどよめきが流れてくる。彼女もようやくその気分になつてくると、家のわきの庭へ出て行った。女たちが、脚が緑色をした白い仔羊だの木製の馬だのをかかえた子供をつれてお祭りから帰ってくる。もうこれ以上飲めないといった男がふらふらしながら通る。たまには家族づれでのどかにやってくる模範的な夫もいた。しかし、たいていは女子供だけだ。薄あかりも消えて行くころ、家にしばらくつけられて居る母親たちは、白いエプロンの下で腕組みをしながら路地のあちこちで世間話をしていた。

ミセス・モレルは一人きりだったが、それに慣れていた。息子と小さな娘は二階で眠っている。だからこそ、自分の背後にはどっしりと安定した家庭があるという気持ちになるのだった。しかし、これから生まれてくる子があるために、彼女はみじめな思いだった。世界が素漠と感じられた。すくなくともウィリアムが成人するまでは、自分の身には何一つ起りようがない気がするのだった。自分にはこの素漠とした忍従以外何もないのだ——子供たちが大きくなるまでも三人目を生める余裕はなかった。生みたくなかった。その子の父親は酒場で給仕のまねをしてビールをついで廻っては、自分も酒浸りになっている。彼女は夫を軽蔑していた。しかもその彼に縛りつけられているのだ。また子供が生まれるというのは余りにも大きい負担だった。ウィリアムとアーニーがいなかったら、彼女はこれ以上貧苦と醜悪と卑賤の生活に耐えられなくなっていた。

身体を動かすのも大儀なのに、彼女は家の中にいられなくなつて表の庭まで出て行った。暑さに窒息しそつたのだ。将来を思うと、生きながら地下に葬られていような気がした。

おもての庭はいばたの生垣に囲まれた小さな正方形をしている。彼女はそこに立って、花の香りと暗くなつて行く美しい夕暮にひたつて気持ちを鎮めようとした。家の小さな門の前に木戸があつて、その向いから丘の上まで背の高い生垣にはさまれた細い道がつづき、両側には草を

刈つた牧場が赤々と日に照らされている。頭上に広がる空には光がみなぎり、脈打っていた。夕映えは急速に草原からひいて、地面も生垣も薄闇に煙つた。暗さが深まるにつれて丘の上の赤い光が輝きを増してくる。その輝きの中から、かすかになったお祭りのざわめきがつたわつてきた。

時々、生垣にはさまれた闇の底から、男たちが千鳥足で帰ってきた。一人の若者は下り坂のさいごの急傾斜で駆け足になると、音を立てて木戸にぶつかった。ミセス・モレルは身震いした。男は猛烈な悪態をつきながら立ちあがつたが、まるで木戸が彼をいためつけようとしたと思つてでもいるようで、哀れでもあつた。

こんな生活が永久に変わらないのだろうか、と思ひながら彼女は家の中へはいった。このごろでは、すでに、あきらめかけていた。少女時代ははるかかなたに思えて、こうして谷底長屋の裏庭を重い足どりで歩いている自分が、十年前にはシャネスの町の防波堤の上を軽々と駆けていた少女と同じ人間なのだろうか、と考えこむのだった。

「わたしにどうしろというのだ？」彼女は思った。「こんな生活がわたしに何の関係があるのだ？ これから生まれる子供だって！ このわたしなんか問題にされていないみたいだ」

時には人生が一人の人間をとらえて肉体だけを運び去ることがある。その人間の歴史はかたちづくられても、それが真の人生ではなくて、当の人間は見過されたように置きざりにされてしまふのだ。

「わたしは待っている」ミセス・モレルは思った——「わたしは待っているのに、待っているものは永遠にやってくるはずがない」

やがて彼女は台所を片付けてランプに火をいれ、暖炉に石炭を足してから、あくる日の洗濯物を選びだして水につけると、椅子に坐つて針仕事にかかった。何時間も、彼女の針は規則正しくきらきらと布のあいだを動きつづけた。時々彼女は痛くなった身体を動かして嘆息をついた。そしてそのあいだも、この生活の中ではどうすれば一番いいだろうか、子供のためになるだろうかということばかり考えていた。

十一時半に夫が帰ってきた。黒々とした口ひげをたくわえた顔は真赤で、てかてか光っていた。首がかすかにうなずいている。彼は御機嫌だった。

「おう！ おう！ 待っててくれたのかい？ アントニーの手伝いをしたんだよ、いくらくれたと思う？ たつたの半クラウンよ、それきり——」

「のこりはビールで穴埋めしたつもりなのよ」彼女はつっけんどんに言った。

「それともなかったんだぜ——なかったんだ。ほんとだよ。今日はちつとも飲めなかった、飲めなかったんだよ」彼の声はやさしくなった。

「さあ、おまえにジンジャブレッドを持ってきたやつだよ、子供たちは椰子の実だ」彼はジンジャブレッドと、毛のはえた椰子の実をテーブルの上に置いた。「おまえはけつしてありがと

うってことを言ったためしがないんじゃないかね？」

彼女は仕方なく椰子の実をとりあげると、中に椰子乳がはいっているかどうか振ってみた。

「いい実だぞ、まちがいねえ。ビル・ホジキンソンにもらったんだ。『ビルよ』って言ってやったんだ。『おまえ、椰子の実が三つもいりやしねえだろう、うちのちびと女房にやるから一つくれねえか』ってな。そしたら『やるよ、ウォルター』って言うんだ。『どれでも気に入ったのを持ってきなよ』ってな。だから、ありがとうって一つもらったんだ。奴の目の前で振ってみるわけにやいかねえと思ったが、奴が『いい実かどうか確かめた方がいいぜ』って言うんだ。だからよ、いい実なのはまちがいねえと思つたんだ。あいつはいい男だぜ。ビル・ホジキンソンは、いい男だ！」

「酔っぱらつてゐる時なら何だつてくれます。あんただつてその酔っぱらいの仲間なんです」ミセス・モレルは言った。

「なに、この糞ばあ、誰が酔っぱらつてゐるんだ？」モレルは言った。今日一日月星亭の手伝いをしたというので大御機嫌の彼は、お喋りをやめなかつた。

ミセス・モレルはひどく疲れてゐる上に彼のお喋りにむかむかして、夫が火をかきたててゐるあいだに、さつさと寝に行つてしまつた。

ミセス・モレルは古い家柄の中産階級の出であつた。その家はハッチンソン大佐（一五五一—一六〇一）の指揮者で、クロムウェルとともに関つた。命の指導者で、クロムウェルとともに関つた。主権を持つようになると彼と対立し、共和主義者として対抗した。

たノッチンガム」とともに戦つた代々非国教徒の敬虔な組合教会主義者として知られてゐた。レーヌ製造業者だつた彼女の祖父は、ノッチンガムの同業者がたたくさん倒産した時期に破産した一人だつた。父親のジョージ・コバードは技師で——その白い皮膚と青い瞳がじまんの、大柄で美貌の気位の高い男だつたが、彼がさらに誇りにしてゐたのはその誠実さだつた。ガートルードは小柄なところは母親似だつたが、その誇り高く不屈な気性は、父方のコバード家から受けついでいたのである。

ジョージ・コバードは自分の貧乏をひどく嫌つてゐた。彼はシャネスの造船所の技師長になつた。ミセス・モレルすなわちガートルードはその次女だつた。彼女は母親の味方で、母が一番好きだつたが、その澄んだ反抗的な瞳と広い額は父方のものだつた。上品でユーモアに富み、やさしい心を持った母親にたいする父の傲慢な態度を、彼女は憎んだものだ。シャネスの防波堤の上を駆けて行つてボートをみつけたこと、造船所へ行くとき誰からもかわいがられお愛想を言われたことを、彼女は覚えてゐた。彼女は可憐な、なかなか気位の高い子だつたのである。

私塾で自分が助手をつとめたおかしな女の校長のことも覚えてゐる。この仕事は楽しいものだつた。それにジョン・フィールドがくれた聖書もまだ持つてゐた。十九歳の時には、いつもジョン・フィールドといつしよに礼拝堂から帰つたものだ。彼は金持の商家の息子で、ロンドン

つてゐた。

彼女はいつまでたつても、ある九月の日曜の午後のことを何から何まで思い出すができた。二人は彼女の家の裏にあるぶどうの棚の下に坐つてゐた。ぶどうの葉の隙間から洩れる日ざしが、二人の上にレースのスカーフのような美しい模様をおとしてゐた。美しく紅葉して、まるで平たい花のようなぶどうの葉もあつた。「じつとしてゐるんだよ」彼は叫んだ。「きみの髪の毛は何にたとえたらいいんだろう！ 銅か金みたいに艶があるかと思うと、銅を熱したときみたいに赤くも見える。日があたると、そこだけ金糸がまじつてゐるのに見えるよ。茶色だなんて、誰が言つたんだらう。きみのお母様は黄色がかったねずみ色だとおしやるけれど」

彼女はきらきら輝いてゐる彼の目を見たが、その澄んだ表情からは、心の中の昂まりをうかがうこともできなかった。

「でも、あなたは商売は嫌いだと言つてゐるじゃないの」彼女は追求した。

「嫌いなんだ。大嫌いだよ！」彼は激しく叫んだ。

「そして牧師になりたいのね」彼女はなかなば嘆願するように言った。

「そうしたいんだ。自分でも一流の説教ができる自信さえあれば、それが嬉しいんだ」

「それなら、どうしてそうしないの？——どうして？」彼女の声は反抗心にあふれてゐた。「わたしは男だつたら、ぜったいになつてみせ

るわ」

彼女は昂然と頭をもたげている。その彼女を前にして、彼はやや臆病になっていた。「しかし、何しろ親爺が頑固なんだ。親爺はばくに商売をやらせる氣でいる、そうなればやらせずにはいないんだ」

「でも、あなたは男なんでしょ」彼女は叫んだのだった。

「男にだってできないことがあるよ」彼は途方に暮れたように眉をしかめて答えた。

今、男であることがどういふことなのかも多少は知って、こうして谷底長屋の仕事に追われている彼女には、たしかに男だからといって何でもできるわけではないことがわかっていった。

二十歳の時、彼女は健康を害してシャネスを離れた。父は退職して故郷のノッチンガムにひきこもった。ジョン・フィールドの父も破産してその息子は教師になり、ノーウッドへ赴任した。それきり、彼女は二年後に意を決して問い合わせてみるまでジョンの消息を知らなかった。彼は、下宿の女主人で財産のある四十歳の未亡人と結婚していた。

それでも、ミセス・モレルはジョン・フィールドのくれた聖書を手放さなかった。彼女にはもはや彼が——彼がどんな男だったのか、どんな男のはずでなかったか、これはもう充分わかっていった。だからこそ彼女は彼のくれた聖書を、ただ自分自身のために大切に、彼の思い出をそっと胸の底に秘めておいたのである。彼女は死ぬ日まで、三十五年のあいだ、彼のことを

口にしなかった。

二十三になった時、彼女はあるクリスマス・パーティーで、エリウォッシュ渓谷の人間だという青年に会った。その時、モレルは二十七だった。がっしりした体格で姿勢のよい、実に顔立のいい男だった。黒々と波打っている髪の毛もよく、一度も刺つたことがないあごひげも黒々と生氣にみちていた。頬の血色がよくて、しじゅう、それも腹の底から笑うので、赤く濡れた唇が、人目を引いた。そのよくひびく高らかな笑い声は、めったに見られないものだった。ガートルード・コバードは恍惚として彼に見惚れた。いかにも鮮やかな彩りと生氣にあふれていた。その声は屈託なげで滑稽なところがあり、誰とでもこだわりなく楽しく話しているのだった。彼女の父親もユーモアにかけては誰にもひけをとらなかつたが、そのユーモアには辛らつなところがあつた。この男のはままったく違う、やさしい、知性とは無縁な温かみがあつて、無邪気なふざけかたを思わせた。

彼女自身はこの反対だった。好奇心がはげしく、感受性が鋭いので、人の話を聞いているのが楽しく、また話させるのが上手だった。観念的なことに興味があつたから、きわめて知的な女だと思われていた。彼女が一番好きなのは、宗教とか哲学、政治などについて教養のある男と議論することだったが、そういう機会にはめつたに恵まれないので、いつも人々に彼ら自身のことを語らせては、それを楽しむ方にまわつた。

彼女はやや小柄なほっそりした身体で、額がひろく、絹のような茶色の巻毛がその上にたれていた。正面から相手を見ずえる青い瞳は誠実で真剣だった。コバード家の血をひく手は美しく、着るものはいつも地味だったが、その晩も紺の絹の服に、銀製の帆立貝をつないだ形の変った鎖をしめていた。装飾といえどこれに、あと、ねじれた形のどっしりした金のブローチをつけているにすぎなかつた。まだまったく汚れを知らず、ひたすら神を信じて、純真そのものの魅力に輝いていたのである。

ウォルター・モレルは彼女の前で自分が溶けてしまふような氣がした。この坑夫にとって、彼女はあの上流婦人という神秘と魅惑の典型であつた。彼に話しかけてくる言葉は南部の発音の生粋の英語で、これを聞くと彼は戦慄を感じた。彼女もじつと彼を見ている。彼はダンスが上手で、心から楽しくてたまらないように自然に踊つた。彼の祖父はフランスからの亡命者で、はたしてこれが結婚と言えるかどうかは別として、英国のバーの女と結婚したのだった。ガートルード・コバードがこの若い坑夫の踊るのを見てみると、その動きには魅惑的とも言える一種の歡喜が感じられ、黒い髪のためさがつたその赤い顔は肉体の上に咲いた花のように見えて、どのパートナーにおじぎをする時にもきつと笑っているのだった。こんな相手に出会つたことのなかつた彼女は、何というすばらしい男だろうと思つた。彼女には父親だけがすべての男の原型だったが、父親のジョージ・コバードには

気位が高く、美貌で、ややひねくれたところがあつた。本を読むといえは神学書に親しみ、共感を抱ける人間といえは唯一人、キリストの使徒パウロだけであり、人を監督する時には厳格をきわめ、親しみをさせる時にも皮肉がまじつて、官能的なよろこびというものはいっさい受けつけない——父はこの抗夫とはまったく違っていたのだつた。ガートルード自身にも、ダンスなどは軽蔑するところがあつた。ダンスが上手になりたいなどとは考えたこともなければ、ロウジャー・ド・カヴァリーのようなかんたんなダンスさえ覚えたためしがなかった。父親と変らないビュリタンであり、あくまでも高潔厳格だったのである。だからこそ、ほの暗く暖かい金色につつまれたこの男の生命の炎が、つまり思想や精神のたがをはめられてはじめて白熱する彼女の生命とはちがつて肉体そのものからゆらめき上るろうそくの炎にも似たその炎が、彼女には何か魅惑的な、自分の手のとどかないものに思えたのだつた。

彼女が近づいて来て、見上げるような身体で彼女におじぎをした。まるで酒を飲んだ時のような独特のぬくもりが彼女の全身を走つた。

「さあ、こんどはわたしと踊ってください」彼は愛撫するような声で言つた。「むずかしいことなんかありません。ぜひあなたが踊るところを見たいんです」

彼女は、自分は踊れないと断つてあつたのだつた。彼がひどく下手に出てくるのを見て、彼女は微笑した。その微笑がじつに美しかった。

男はそれに感動して、何もかも忘れてしまった。「いえ、わたしは踊りません」彼女はやさしく言つた。きれいな、よくとおる声だつた。

自分でも無意識のうちに——彼は本能的に當を得たことをするばあひが多かつた——うやうやしく腰をかがめた彼は、彼女の隣りに坐つた。「でも、あなたまで踊るのをやめたりなさつてはいけないうわ」彼女はとがめるように言つた。

「いや、こんどのは踊りたくないんです——わたしの好きなダンスじゃないから」

「そのくせ、わたしと踊ろうとおっしゃつたのね」

この言葉に彼は大声で笑つた。

「そう言やそうだな。これじゃ氣取つてみせてもだめだ」

こんどは彼女の方が軽く笑う番だつた。

「氣どりをお捨てになつたようにも見えないわよ」

「豚のしっぽみたいなんでもね、かっこをつてなきやもたないんですよ」彼はいささか派手に笑つた。

「そんなあなたが抗夫なのね！」彼女は驚きをあらわにして言つた。

「そうです、十のときから山で働いてます」

彼女は啞然とした表情で彼を見あげた。

「十のときから！ さぞお辛かつたでしょう？」

「すぐ慣れますよ。鼠みたいに穴ぐらにもぐつて、夜になると外の様子を見に出てくるんです」

「めくらになつたような氣がするわ」彼女は言

つて眉をしかめた。

「もぐらみたいだね！」彼は笑つた。「そうだよ、ほんとにもぐらみたいに這いまわつてる奴もいますよ」彼は顔を前へつきだして、目のないもぐらが鼻でにおいを嗅ぎながら方角を探っているようなかっこうをしてみせた。「だけれどもぐらなんてもんじゃないんだ！」彼は素朴に激したように言つた。「もぐらはあんな深いところまで行きやしない。しかし、そのうちご案内させていただきます、ご自分の目でご覧になるといい」

彼女は愕然として彼を眺めた。人生の新らしい側面がとつじよとして目の前に開けたのだつた。何百人という抗夫が地中で汗を流して働き、夕方になると出てくる、そういう生活があるのを彼女は理解した。彼女には彼の姿が氣高く見えた。彼は毎日生命を賭してゐる、しかも陽氣に。彼女は心から謙讓な思いで、訴えるような表情さえこめて彼の顔を見た。

「お嫌ですか？」彼はやさしくきいた。「嫌だらうね、着てるものが汚れるし」

彼女はこんな風にくだけた口のきき方を人にされたことがなかつた。

つぎの年のクリスマスには二人は結婚し、三カ月のあいだ彼女は完全に幸福だつた。六カ月のあいだはじつに幸福だつた。

彼は禁酒の誓約書に署名し、禁酒主義者の水色のリボンをつけた。何をするにも派手な男なのだ。二人が住んだのは彼の持家だつた。すくなくとも彼女はそのつもりでいた。小さい家だ

つたが暮しにくいこともなく、家具も彼女の堅実な気風にあらどつしりしたいものがいれてあった。隣近所の女たちにはややなじみにくかつたし、モレルの母親や姉妹も彼女の上流風なところを何かにつけて嘲笑したが、彼女は夫が身近にいてくれさえするなら、すこしも淋しいとは思わなかつた。

時々、愛人同士のような話にも飽きた彼女が、心に思うことをまじめに彼に話してみようとするものがあつた。彼は尊敬の念を見せて聞いている、しかし理解してはいないというところが彼女にはわかつた。このために、彼女は心と心の結びつきを深めたいという努力をあきらめる氣になつて、ふと不安な思ひにとらえられることがあつた。時には夕方になると彼がそろそろわしだすことがある。この人はただわたしのそばにいただけでは満足できないのだ、と彼女は思った。彼がこまごました仕事に手をつけるようになる、彼女ははつとした。

彼はきわめて手先が器用で、どんなものでも作れるし、修理もできた。だから彼女はこんな風に切りだす。

「お母さんのとこにある火掻き棒はとてもいいわ——小さくてしゃれてて」

「そうかね？ あれはおれが作ったんだよ、だからおまえにも作ってやろう」

「何ですって、だって鉄よ！」

「だったらどうしたってんだい？ まったく同じじゃなくても、そっくりのを作つてやるよ」
彼女は家の中がちらかるのも、うるさいハン

マーの音も氣にならなかつた。夫は仕事が見つかつて幸福なのだつた。

ところが七カ月たったとき、彼のよそ行きの上衣にブラシをかけていて、胸のポケットに書類はいっているのにさわつた彼女は、急に好奇心に駆られて、それを読んでみた。結婚するときに着たこのフロックコートはめつたに着ることがなかつたから、それまでは、書類を見つけて不審を抱くような機会もなかつたのだ。それはこの家の家具の請求書で、いまだに未払いのままだつた。

「ねえ」夜になつて、彼が身体を洗い食事をすませたときに彼女は言つた。「これがあなたのフロックコートにはいつてたんですけど、まだ支払いをすませてないの？」

「うん。暇がなかつたんだよ」

「でも、あたしにはみんな払いはすんでいるつておつし、やつたじゃありませんか。あたしが土曜にノッチンガムへ行つて払つてくる方がいいわ。他人の椅子に坐つて、払いのすんでないテーブルで食事したりするのは嫌ですもの」

彼は黙つていた。
「あなたの銀行の通帳持つてつていいでしよう？」

「持つてつたつていいよ、役に立つかどうか知らないがね」

「でも——」彼女は言いかけた。彼の話ではまだかなり金が残っているはずだつた。しかし、いろいろ聞いてみてもむだだということがわかつた。彼女は激しい怒りとやり切れなさに凝然と坐つていた。

と坐つていた。

翌日、彼女は夫の母親のところへかけて行つた。

「ウォルターの家具は、あなたが買つてくださったんじやありませんか？」彼女ははずねた。

「ああ、そうだよ」年とつた女はつっけんどんな返事をした。

「で、彼はそのお代にいくらお渡ししたんでしようか？」

義母は激怒した。

「そんなに聞きたいんなら言うけど、八十ポンドだよ」

「八十ポンド！ その上まだ四十二ポンド支払いが残つてゐるんですか！」

「仕方がないね」

「でも、そんなに何に使つちやつたんです？」

「みんな受取があるんじゃないかね——それにあたしが貸した十ポンドと、ここでの結婚式にかかつた六ポンドもあるよ」

「六ポンドですつて！」ガートルード・モレルは思はず叫んだ。彼女の父があれだけ莫大な金を結婚式に出した上に、ウォルターの親の家での飲み食いさらに六ポンドも彼の金を使つたなどというのは、法外に思へた。

「それに、あの人の二軒の家には、どのくらい出したんでしょうか？」彼女は訊いた。

「あの二軒——どの家の話だい？」

ガートルード・モレルは唇までまっさおになつた。彼は、自分が住んでいる家も隣の家も、自分の所有だと言つていたのだ。

「わたし、わたしたちの住んでいる家は——」
彼女は言いかけた。

「あれはあたしの家だよ、二軒とも」義母は言った。「それにまだ払いもすんでないよ。抵当の利子を払うのがやとでね」

ガートルードは青ざめて黙っていた。彼女には、すでに父親の性格がのりうつっていた。

「では、わたしたち、あなたに家賃をお払いしなくてはなりませんわ」彼女は冷やかに言った。

「ウォルターが払ってますよ」母親は答えた。

「おいくらですか？」

「一週間、六シリング六ペンスよ」

あの家には高すぎる家賃だった。ガートルードはしっかり頭をあげてじっと前を見ていた。

「あんたはいい身分だね」年取った女は皮肉を言った。「お金の苦労は一人で背負ってあんたには勝手なことをさせといてくれる夫がいるんだからさ」

若い妻は黙っていた。

口に出してはほとんど何も言わなかったけれども、夫にたいする彼女の態度は変った。誇り高く、信義を重んずる彼女の魂にひそんでいたものが、岩のように固まってしまったのだった。

十月になると、彼女はクリスマスamasのことしか考えなかった。二年前のクリスマスamasには、彼女は彼と出会った。去年のクリスマスamasには結婚した。このクリスマスamasには彼の子を生むはずだった。

「あんたはダンスをしないんですか、奥さん？」十月のある日、隣の女が聞いた。ベストウッド

のブリック・アンド・タイル館という宿屋で開かれるダンスの講習会の噂でもちきりだった。

「ええ——ぜんぜん踊りたいと思ったことがないんです」ミセス・モレルは答えた。

「まあ驚いた！ それでよくあんな御主人と結婚なさったものね。あの人はダンスがうまいんで有名じゃありませんか」

「あの人が有名なんだとは知りませんでしたわ」ミセス・モレルは笑った。

「あら、でもほんとよ！ マイナーズ・アームズ館の娯楽室で五年以上もダンス教室をやっているんですよ」

「ほんと？」

「ほんとですとも」相手はむきになった。「火曜と木曜と土曜にや大勢つめかけてね——なんでも男と女のおもしろい話もいろいろあったようですよ」

ミセス・モレルにとっては、こういう話はやりきれないのに、それをたつぷり聞かされなくてはならなかった。近所の女たちは、はじめ彼女に情容赦もなかった。それというのも、自分ではどうにもならないことだが、彼女に上流風のところがあつたからである。

彼が家へ帰ってくるのがだんだん遅くなりだした。

「このごろはあの人たち、とても遅くまで働いてるらしいわね？」彼女は手伝いに来ている女に言った。

「前と変らないと思いますけどね。ただエレンズへ寄ってみんな一杯やって、そのうちにお

喋りが始まっちゃうからねえ！ ご飯も冷えちゃうけど、自業自得ですよ」

「でもうちの主人は飲みません」

手伝いの女は持っていた洗濯ものを取落すとミセス・モレルを見つめたが、それきり何も言わずにまた仕事にかかった。

子供が生まれたあと、ガートルード・モレルはひどく身体の工合が悪かった。モレルはいたわってくれた。申しぶんのないいたわり方だった。しかし、彼女は実家から遠く離れているのがひどく淋しかった。今では彼がそばにいても淋しく、むしろ彼がいる時の方がよけい淋しく感じるのだった。

その男の子は、はじめは小さくて弱かったのに、たちまち大きくなった。きれいな子で、金色の巻毛は濃く、目は藍色だったが、これはだんだんに明るい灰色に変って行った。母親はこの子を熱愛した。彼はちょうど母親のやりきれない幻滅感が耐えがたいほど激しくなっていた時に生まれたのだ。人生にたいする信念がゆらぎ、魂が索漠とした淋しさを味わっていた時に彼女はこの子を溺愛し、その父親は子供に嫉妬した。

遂にミセス・モレルは夫を軽蔑するようになった。この子供にかかりきりになって、その父親から離れてしまった。彼も妻をかまわなくなり、家庭の新鮮な味は消えてしまった。あの人には忍耐力がない、彼女はやりきれない気持でそう思っていた。あの人はその時々何かを感ずるだけの人だ。何をしても長続きがしない。

外見ははなばなしくても、中身は何もないのだ。夫婦のあいだに戦いがはじまった——片方が死ぬまでは終わらない、血なまぐさい、恐ろしい戦いが。彼女は彼に責任を持たせるように、彼の義務を果さるように戦った。しかし彼はあまりにも彼女とはかけはなれた人間だった。その性格は官能そのものでしかなかった。彼女は夫に何とか道徳や宗教を植えつけようとした。どんなことにもまじめに取組む人間にしようとした。彼はそれに耐えられず、半狂乱になった。

この赤ん坊がまだ小さいうちに、父親はひどいかんしゃく持ちになって、何をしてもかすかわからない人間になってしまった。父親がわめきだすと、子供はむずかりだすのだったが、そのむずかりかたがすこし激しくなると、頑丈な抗夫の手がのびて赤ん坊を撲った。するとミセス・モレルは夫を憎悪し、その憎悪は幾日もつづいた。すると夫は飲みに出て行ってしまう。それでも、妻は夫の行動に無関心だった。ただ、彼が帰ってきたとき痛烈な皮肉を浴びせるだけだった。

夫婦のあいだにへだたりができたために、彼は意識的に無意識にか前ならなかったようなことまでして、ひどく彼女を傷つけた。

ウィリアムはわずか一歳だったが、母親はこのきれいな子が自慢だった。今では彼女は貧しかったけれども、着せるものは実家の姉妹がくれるので不自由しなかった。駝鳥の羽で小さな白い帽子を髪にため、白いオーバーを着ていると、帽子の下からかわいい巻毛がのぞくこの子

が、彼女には嬉しくてたまらなかった。ある日曜の朝、ミセス・モレルは、階下で父と子がお喋りをしているのをベッドの中で聞いていた。そのうちに彼女はうとうとと眠りに落ちた。やがて彼女が階下へ降りて行ってみると、暖炉の火は勢よく燃えて部屋は暑く、朝食を乱暴に並べた食卓を前にして、モレルが何となくおずおずした態度で暖炉のそばの肘掛椅子に坐っていた。ところが彼の脚のあいだに立っている子供は——羊のように毛を刈られて、妙なかつこうの丸い頭をむきだしに——ふしぎそうに彼女を見あげていた。暖炉の前の敷物に貼げた新聞紙の上には、千手菊の花弁のように無数の半月形をした毛がちらかつて、赤々と燃える火に照らされていた。

ミセス・モレルは立ちすくんだ。これは彼女のはじめての子だったのだ。彼女はまっさおになったきり、口がきけなかった。

「どうだい、この子は？」モレルは不安そうに笑った。

彼女は両手のこぶしを握りしめると、それを振りあげて前へ出た。モレルはひるんだ。

「殺してやりたいわ、あんたを！」彼女は言った。二つのこぶしを振りあげたまま、彼女は怒りに声も出なかった。

「この子を娘にしたかねえだろ」妻の視線を避けて顔を伏せているモレルは、おびえた声で言った。もう笑おうとはしなかった。

母親は虎刈りに刈られてしまったわが子の頭を見た。その髪に両手をのせると、頭をいとお

しむように撫でた。

「ああ——坊や！」彼女は絶句した。その唇がふるえ、顔がくしゃくしゃに歪んだと思うと、彼女はひたたくるように子供をかかえあげ、その肩に顔を伏せて激しくむせび泣いた。彼女は泣くことのできない女だった。男と同じくらい泣くことのできない女だった。その激しいむせび泣きは、身体の中からしぼり出すような泣き方だった。

モレルは膝に両肘を突いて、甲の関節が白くなるほど両手を固く握りあわせていた。まるで息もできないかのように、気も遠くなる思いでじっと火に見入っていた。

やがて彼女はむせび泣くのをやめると、子供をあやして食卓を片づけた。暖炉の前の敷物に貼げた、巻毛の散乱している新聞紙には手をつけようとしなかった。ようやく、夫がこれをまとめて暖炉の奥の方に捨てた。彼女は口を固く結んだまま、ひっそりと仕事をつづけていた。

モレルは小さくなっていった。情ない顔でこそこそ歩きまわるばかりで、その日の彼の食事はあわれそのものだった。妻はいいねい口のきき方をして、彼のしたことにはぜったいふれなかった。しかし、彼は何か決定的なことが起ってしまったのに気づいていた。

のちになってから、彼女は自分がばかだった、子供の髪はいずれ刈らなければならなかったのだと言った。しまいには、あの時あなたが床屋をしてくれたのはちょうどよかったのだとさえ言った。しかし彼女もモレルも、あの行為が彼